



「研修便り」は、高知市立学校教職員研修の成果・内容の共有、研究所から発信する情報の周知を目的として、発行していきます。

3年経験者研修 授業充実研修Ⅰ（小・中）

平成27年6月9日（火）実施

目的

教員としての自覚と経験に応じた授業及び学級経営の指導力と実践力の向上を図るとともに、教員として資質・能力の向上を図る。



子どもは授業の中でいかに思考・表現するか

～これからの授業づくりの方向性～

講師：横浜市立羽沢小学校 齋藤 一弥 校長

1 これから求められる力

これからの社会

一人の**自立**した個人が多様な個性・能力を生かし他者と**協働**しながら新たな価値を**創造**していくことができる柔軟な社会

対応する力をつけるために

自立・協働・創造の授業における汎用的能力

- 自立**—主体性 コミュニケーション能力
伝えたいことがあることの自覚
- 協働**—多様性 コラボレーション能力
伝え合うことで高まることへの気づき
- 創造**—発展性 イノベーション能力
互いの考えを交流して答えを出す楽しさ

2 講師による模擬授業から

ここから始める授業改善

- 学習指導要領をチェック！
活動、内容、能力に分けて読み取る。
- 授業展開・方法のイメージをもつこと！
子どもが考えたアイデアの関連付け、価値付けを行って、個々が満足感を感じる場を重視する。

子どもの思考力・表現力をはぐくむ授業づくり

- 思考対象を自覚化**させる。
本質的な問いを設定し、思考対象を明確にする。
- 思考プロセスを可視化**する。
ゴールに向かって、子どもが思考していけるようにする。
→ **思考プロセスのスタンダード**（根拠を明確にして説明する力）を身に付けさせる。
- 思考結果として知恵を獲得**させる。
事象に適した表現方法の確認をし、目的に応じて使い分けていくことの大切さを学ぶ。

3 これからの授業づくりで大切にしたいこと

- 教材研究 ～身に付ける力の明確化～**
 - 教材を通して身に付ける力の明確化
 - 子どもの問いとなる思考対象の明確化
 - 指導内容の系統性・関連性の確認
- 文脈を描く ～教科らしく思考・表現する～**
 - 身に付く力を明確にした上で、学校でしか学べない、価値ある文脈の学び
 - 活用は手段であり、それを目的・ゴールとしない思考・表現を必要とする展開へ
- 授業コントロール ～思考過程・ゴールを描く～**
 - 子どもが学ぶよさを実感すること
 - 思考過程の場を自在に描き直すこと
 - 思考対象・過程・結果の三つを意識して、学習のハードルの上げ下げを大切にすること



【受講者の感想】

子どもたちの思考がつながり、深まる模擬授業に学ぶべきことが多くあった。そこには、教師側が意図的に仕組んだ発問や切り返しがあり、子どもたちの思考の流れがとぎれることがなかった。それは、思考する対象が明確であるということと、一つ一つの問いが本質的であるということからだと感じた。また、すべての子どもの発言を大切にするという意味でも、それぞれの意見に価値を付けるということ、主体的な学びが生まれるのだと感じた。

概要 学校教育実践を推進していく中堅教員としての使命感を養うとともに、児童生徒の学力向上のために、学習指導要領を具現化できる授業実践力を身に付ける。

「教師の力量形成について —学校全体の教育力を高めるために—」

講師：横浜国立大学 高木 展郎 教授

● 教育状況の変化における学力観の転換

知識の習得と再生

から

思考力・判断力・表現力

の時代へ



「考える」こと・コミュニケーション活動を通じた学力の育成 = 各教科等における言語活動の充実

教師は、子どもの思考を支え、「考える」ことをうながす発問・指示をする。
⇒ 「どうする、どうして、なぜ、わけは、だから、どうしたい、どういうこと。」

小・中・高等学校を通じ、国語科のみならず各教科等において、記録、要約、説明、論述といった言語活動を発達段階に応じて行うことが重要

● 初等中等教育における教育課程の基準等の在り方

「何を教えるか」
知識の質・量の改善

に加えて

「(子どもが)どのように学ぶか」という
学びの質や深まりを重視

学びの成果として
「(子どもに)どのような力が身に付いたか」という視点を重視

思考力・判断力・表現力等を育む授業づくり

○ 授業研究の意識改革

- ・ 単元（学習の流れ）を見通した授業づくり ⇒ すべての観点を単元を通して育成する
- ・ 「付けたい力（育成すべき学力）」を明確にした学習指導案の重要性
- ・ 「ひとりで学ぶ」→「みんなで学ぶ」（ペア・グループ）→「学びを振り返る」（クラス全体）
- ・ 指導計画や学習指導案の組織的な作成

○ 「聴いて 考えて つなげる」授業づくりの方法

「聴く」ことを鍛える

- ・ 止める勇気と続ける根気・・・「聴いて」いない場合には、授業を止めてでも、意識させる
- ・ 他者の意見を復唱させることによって、聴かなくてはならない教室状況を作る
- ・ 聴くと待つ・・・教師が聴き上手になる・我慢と忍耐

○ 学校全体で、チームとしての学校

- ・ 小中接続で9年間での育成 「チーム〇〇小学校・チーム〇〇中学校」
- ・ 汎用性を高める授業づくり

あたたかな聴き方＝相手の話を分かろうとして聴く（能動的な聴き方）
やさしい話し方＝相手に分かってもらおうとして話す（能動的な話し方）



・ 受容的な態度、共感的な態度、他者の尊重・教室の中の安心感（居場所）・教室というコミュニティー

【受講者の感想】

- ・ 言語活動が手段であるということが分かった。意識しすぎて、いかに言語活動の場を作り出すかにとらわれていたように思い、これからの授業構成を見直していこうと思った。
- ・ これまでたくさんの授業研究や研修を重ね、日々の授業や学級経営に役立ててきたが、本研修では、その方法や知識がいくらか古く、固定概念のようになっていたことに気付かされた。

これからの20年が大きな変わり目である。今まで授業で当たり前に来てきたことを「本当にこれでいいのか？」と振り返ってほしい。